

旅団作戦の作戦伝令として

山形県 羽柴 暁太郎

昭和十九年秋十月も二十日を過ぎた午後のこと、突然中隊本部の営庭に全員集合と命令がくだる。なにごとかと各内務班から出て集まると、営庭には人事係の野口曹長が早くから待っている。

皆が集まると曹長が

「編成を達する」

と旅団作戦に参加する者の名が発表され、班長桜井伍長以下十五人、以上の者は準備して翌日の出発を待つようにと達せられました。その十五人のなかに私の名もありました。皆と同じ準備をする今回の旅団作戦では、私たちの班は通信援護で作戦伝令に出される者もいるのとこのとです。

翌朝、完全軍装して営庭に集合し、中隊長の注意事項を受けいよいよ出発す。翼城より候馬鎮まではひろびろ

とした平地ですが、そのなかに一本の軍用道路があり、長い道のりです。里数にして十里とっておりますがとにかく長い。先兵を立て、そのあとに続く。はるか遠くに道路と並行して台上というか段々の小高い丘が続き、そのかなたは高い山につらなっており、天気の良いまごろはなんともいえきれいなものです。

今晩は候馬鎮の兵站どまりとのこと。十月末ごろとなりますと日も短くなるが、今回は若者ぞろいなので行軍も早足で、このぶんでは候馬鎮到着はあんがいはやめだろうとのこと。

道路をはさんで大小の部落が左右にてんざいし、畑地では秋の野良作業の農夫の姿もみられます。畑には夏の収穫の終わったトウキビが、かれて淋しそうにそのまゝ残っているのもみられます。注意深くあたりに目をくばりながらときたま話をしながら歩くと、あんがい早く進むものです。やがて山砲隊から出ている分哨が道路の左側にあるのがみえてきました。

高い望楼に歩哨が立哨しているのが道路よりみえるようになっており、翼城からおうらいする兵隊も手をあげ

て通っております。ここまでくれば大丈夫というところ
です。あと曲沃の町まではいくらの道のりもありませ
ん。しばらく歩くと向かって右側の畑のなかに師団山砲
隊ががちりと駐屯しており、左側の道路からはいった
ところに曲沃の町があります。この曲沃は曲沃県の県庁
の所在地でもあり、町も大きく立派な城壁でかこまれ、
町の中央部に高い仏塔がそびえております。上層部の屋
根の部分がくずれおちているのがとくに印象づけられま
す。

この塔を左にみて候馬鎮まではもう一直線であと一里
です。いきおいに乗った兵士たちも兵站に向かつて早足
の行軍です。夕方早目に鉄道が走っている候馬鎮に到着
して兵站にはいる。

この兵站到糧秣倉庫もあり、また連絡所でもあって、
各部隊から往来する兵隊の宿泊所にもなっております。
今晚は私たち一同もお世話になり、翌朝は新絳に向け出
発する。候馬より新絳まではもういくらもありません。
時間にして二時間弱と思われます。この新絳の旅団司令
部は汾河のあたりで昔の紡績工場跡が司令部に使われて

おります。城内とは違います。

やがて衛兵所を通り司令部のなかにはいり案内された
ところは倉庫を改造した室で、ここでたいきするように
といわれました。室の中はうす暗く、休眠するのに絶好
の場所です。このうす暗い倉庫のなかで横になり寝そ
べっていると、三か月前独歩第三八一大隊（第四百四師
団）が山西省霍県というところで編成されたおりに、隣
部落の後藤瀧太郎氏とであいました。そのときあったき
りそのごこの部隊にいったかは知りませんでした、
いままた司令部内のこの倉庫の廊下でであうとは夢にも
思ってみませんでした。暗い廊下ではあるが姿や顔は間
違いなく後藤さんです。

お互いに顔を見合わせて「ヨオー」と声をかけると
「オオー」と返事をして懐かしげに話しあう私に

「なにしにこられたの」

「作戦に参加」

という。私は

「なにしてる」

と聞くと

「将校の当番をしている。四角なお盆にまんとうをいっぱいのっけて将校室に行くんだ」と

「誰の当番」と聞くと

「司令部の次級副官今井少尉だ」

とのこと。後藤さんは大きな手を広げてまんとうをわしずかみして私に

食べるしてくれました。私はびっくりおどろき

「差しつかえないか」と聞くと

「ウウン差しつかえない」

といってお盆の台のうえに置き、私にくれたまんとうのあとを手でならして将校室へといった。なんともありがたかった。皆でわけあって食べたがうまかったことを、いまでも思い出し野戦での戦友愛は忘れることは出来ません。

こんなことがあって翌日いよいよ作戦開始です。私と柴崎一等兵は予想通り作戦伝令で閣下の室のそばです。

桜井伍長達は無線援護とのことで、旅団に集結した兵力は行軍して河津という町の先まで進む。旅団長陸軍少将笈田元四郎閣下及び各将校は馬で、下士官、兵は行軍で

河津の町まで、一日たっぷりかかる戦場は、河津の町の西で黄河までつづく。この山岳を呂梁山脈といい敵はおもに山西軍です。この河津の独立歩兵第三百八十三大隊と満泉の独立歩兵第三百八十四大隊の兵力が合流して広い範囲にわたり山西軍の主力閻錫山の部隊と戦闘です。

閣下からだされる命令をすみやかに伝達する任務で、二人で精一杯です。点にして配備している各部隊に走ります。日中ならばよくみえるし、知らないときははずねて聞いても答えてくれますが、夕方走ると伝令や夜の伝令は困るときもしばしばです。部隊がどこにいるか、夜では暗くて見出すことが困難です。ましてや大陸の夜はまっくらで、これにはまいりました。

大陸の夜ってなぜこんなに暗いのかなあと一人ごとのように口に自然に出る時もありました。あれからみると日本の夜はたしかに明るい。いったいなぜだろうか、日本は島国でぐるりが海だから明るいのではないかとしばしば思うことがあります。暗い時には山の彼方をすかしてみる時もあります。

第一線での伝令の任務は本当に苦勞です。作戦が激戦

になればなるほど大変です。夜野営の時また部落には
いって野営する夜は、閣下の室のそばで。戦場も夜は静
かだ。遠くで犬の鳴く声が聞こえてくる。こんな時に敵
の大部隊の移動かなと思う時もあり、今ごろ秋の夜空は
星が一段とキラキラ光って美しく、みるからに寶石をち
りばめたような感じですが。また肌をさすような寒さが身
にしみる夜でも普通内務班ならば寝ている時だけでもあ
たたかい、やはり内務班はいいなと一人ごとに出てくる
ほどです。

第一線では夜明けと同時に奇襲作戦が始まり、つづけ
て日中もこの辺一帯の山西軍に攻撃を開始し、銃声が
山々にこだまします。山砲が撃ち込まれさく裂する音がす
ぐそのように聞こえてくる。また一方では機関銃も聞
こえる。

山岳戦のためになおさら反響が大きい。司令部がある
閣下のそばには音が聞こえるだけで静かである。閣下か
らだされる命令が日ごとに多くなります。いつも口でつ
たえるのでたえずふくしょうして目的の部隊にとどけ
る。

山西軍は第二戦区で、総司令官の閣錫山は今ではこの
さきの山奥の吉県というところにおり、命令、号令を発
している。見渡す限りの山、どこを見ても山で、呂梁山
脈はどこまでつづくやら、ちょうど雲海にいと同様で
す。

今晚は夜行軍で一線に近いところまで進む。もちろん
閣下は馬で下士官、兵は歩き、私たち伝令もそれにつづ
く。夜行軍となりますと日中の作戦で疲れも早く、眠く
なると将校が乗っている馬の尻尾に手をまいて歩く。こ
れは楽なもので、歩くにも半分の力しかいりません。眠
りながらも馬の尻尾から手をはなさない限り、真つすぐ
に歩けます。まして道路もせまいし、歩く道は岩山につ
くられたため、その岩に軍靴の鉄鋌が強くあたると火花
が出てびっくりし、目がばっちりすることもあります。

馬は夜はおとなしく馬そのものが淋しがりやです。夜
行軍も同じこと、移動はなかなか疲れます。また大部隊
の司令部の移動も大変です。戦闘も日ごとに盛んになり
ます。司令部の将校とも日ごとになじんできます。晩秋
の口はいたって短い。

伝令に行く途中のこと、向うから一人の下士官がこっちに歩いて来る。どうやら桜井班長の姿とにている。だんだんと近づいてきた。やっぱり桜井班長だ。腰に指揮刀を下げていたので別人かと思ったところでした。「どこまで」と私がいうと、班長は「旅団司令部」とのこと。「班長、ここはどの辺」とたずねると「そこが黄河だよ」というが班長が指をさしたあの大黄河は一向にみえませんが、いくえにもいくえにもかさなりあった黄土が現在の黄土高原としてつづき、今の陝西省の彼方までみえる。黄河はみたいがそれも出来ず、任務の途中で目的の部隊へと走る。

こんな山奥にはいっても山の斜面を利用して小さな集落があり、横穴をほり窓一つの室がみえます。谷間を一本の細い道が山頂からみえますが人の姿はみえません。昔の日本人の祖先の生活の思いがたします。このへんは敵地区で、どうみても部落民も逃げて部落には誰もいないのだろう。前線では迫撃砲や機関銃の音が盛んに聞こえてきます。遠くで軽機の点射もきこえます。伝令はこの戦場と司令部の間を往来するもので、いつも油断は

きんもつです。

今日は十一月三日明治節で日本四大節の一つです。呂梁山脈の山頂においてむかえる明治節の旅団長閣下以下司令部全員が山頂に集合し、閣下は馬上にてはるか東の空日本に向かって抜刀し、宮城遙拝、ささげつつの号令で山々に鳴りひびき渡るラッパの音、そして笈田閣下のあの雄姿がなんとも口ではあらわしえないものがありました。皇軍の一員としてまた作戦伝令として参加したおかげとなによりの光栄に思っております。伝令として其の責務をすいこうしたことは現在でも自分のほまれとしております。

大陸に従軍し、しかも作戦のさなか宮城遙拝が出来たとは私も感無量の思いです。作戦伝令という重大な任務をした関係で司令部の一員としてあの温厚な閣下とともに歩き、第一線の宮城遙拝に参列したことは私の歩んだ人生のなかでこれほど感激ぶかいものではありません。作戦も十一月十日ほどで終りをつけて旅団司令部も他の部隊も引き揚げる。旅団司令部もいったん河津に出て新絳へと行軍し、司令部の宮庭に集合し解散をする。